地域美術文献研究

岡村　浩

大学学部改組に伴い「情報」「国際」の語がひと頃目立った。一方「地域」も口にされるようになった感がある。その土地でなければ成し難い研究はある。筆者の場合、江戸後期から昭和初期にいたる新潟ゆかりの文人――本県出身もしくは来越作家の主に書画作を取り上げ、新潟ならではの文化的特色を浮かび上らせることに努めている。

一方、小・中・高等学校でよくいう「複合」や「総合」の語は、大学教育にもクローズアップされている。今後の書道・肉筆文化の生き残りを日常生活中に模索しているが、書教育のみならず隣接する関連分野（漢詩和歌・人物史・地方史）と絡ませつつ方策を見出したいと考える。本県には名うての作家の来遊による、中央文化の刺激をうけた形で、書の世界においても相当みるべき人物が、良寛や會津八一以外にも輩出されている。それらは書人・書家というよりは政財界人・武将・儒者・教育者・宗教家・詩歌俳人等である例が殆んどである。専門書家の出現は明治以降ずっと近年になってからのことである。

平成十二年二月四日、長岡市立南中校において「地域と共に学校文化を立ち上げる――総合的な学習・各教科等の提案――」と銘打ち学習研究発表会が、外部の参加者を六百人余り集めて行われた。詳細は述べないが、一部準備に関与した者としてその資料を検討してみているが、「地域と共に」の示すものが、地元講演会ＰＴＡ、同窓会の意のみにとどまらない点に興味を覚えた。

それは、身近なところに学習題材を求め、「地域に学ぶ総合的な学習」として小林虎三郎（号・病翁）や山本五十六の、先人の思想や行いを通して中学校の再生への道を探る内容が盛り込まれている点である。

どう調べ、考え、発表するかを具体的に提示しながらこのように地元先人文化を現教育に活用する姿勢を目のあたりにして、大学における地域美術史・文人研究の有り方を大いに考えさせられるよい機となったのは幸いである。

担当講義では、「碑法帖論」をはじめ随所に越佐芸術の実地調査と史観に関するものに触れている。本稿では、入門者向きのみならず専門として地方美術史中、とくに書画文人研究を進める上で、看過出来ない図書資料を項目別に列記し、一般の興味の喚起をはかりたい。

書画作家・作品紹介を中心としたもの

『越佐の書』（一九七四新潟日報事業社発行　限定一二〇〇部　宮栄二・渡辺秀英監修）　十四～二十世紀半ばに到る書作品・五十人分を掲載する。各人の主だった書作と釈読、略伝を付す。大判であることと、巻末に所蔵者名を併載し様々便がよい。収録される作家は次の通り。〈藍沢南城　會津八一　五十嵐浚明　石川侃齋　泉圓　市島春城　上杉謙信　有願　大野耻堂　小川未明　海雲　蒲生重章　河井継之助　弘厳　小林存　小林病翁　権田雷斧　坂口五峰　佐々木象堂　司馬凌海　新保正與　鈴木虎雄　鈴木文台　雪村友

梅　相馬御風　竹内式部　館柳湾　貞心尼　東條琴台　徳龍　富取芳齋　直江兼続　長井雲坪　長尾秋水　丹羽思亭　萩野由之　橋本独山　原宏平　前島密　巻菱湖　牧野忠精　牧野虎雄　増村朴齋　円山溟北　溝口直諒　村山半牧　山本五十六　山本以南　山本悌二郎　良寛（五十音順）〉

『越佐の墨芳』（一九七九新潟日報事業社発行　限定二〇〇〇部　内山喜助・宮栄二・山本修之助・渡辺庄一・渡辺秀英監修）　七十七人、三八一点を収録。前書の続篇というべきもの。物故作家に限り選ばれ、ただし良寛と八一、貞心尼は注視され重複して登場する。〈會津八一　青野季吉　有田八郎　生田万　石黒忠悳　井田年之助　伊藤道海　井上円了　井部健齋　入沢達吉　上杉景勝　歌川秋南　恵信尼　悦厳素忻　大倉喜八郎　大竹貫一　大矢透　小倉有馬　小原直　桂誉重　木村容齋　金子大栄　解良栄重　小林日昇　小柳司気太　柳原政令　坂口安吾　新発田収蔵　鈴木蔵六　鈴木牧之　関野貞　高島米峯　高野素十　高野貞吉　高橋翠村　高橋竹之介　武石貞松　建部遯吾　田中葵園　貞心尼　土田麦僊　東洋越陳人　富川大塊　内藤信思　中沢雪城　中田瑞穂　中根半嶺　南英謙宗　長谷川泰　原久一郎　万元　肥田野築村　藤蔭静樹　布施秀治　星見天海　堀口九万一　本間俊平　本間雅晴　増田義一　益田孝　松岡譲　丸岡南陔　三上則義　三島億二郎　溝口直温　矢島望山　山田愛山　山田正平　山田到処　山本訥齋　山本由之　芳沢謙吉　吉田東伍　渡辺湖畔　渡部健蔵　良寛〉　釈文と作家略歴を付す。なお題字は八一書よりの集字。

『越佐の画人』（一九八七新潟日報事業社出版部　久保尋二監修執筆）本県出身の著名な作家を日本画、狩野派、南画、旧派、洋画、版画、童画の区分により紹介する。図版はオールカラー刷。〈小林古径　土田麦僊　尾竹竹坡・国観　岩渕芳華　桐谷洗鱗　小杉放庵　齋藤千涯　大矢黄鶴　白倉嘉入　横山操　横尾深林人　中島萬木　小島丹漾　三輪晁勢　村山径　五十嵐浚明　森蘭齋　石川侃齋　行田雲濤　長谷川嵐溪　池田孤村　村山半牧　富取芳齋　行田魁庵　長井雲坪　松川藤蔭　大倉雨村　帰山雲崖　津端道彦　佐々木林風　田村豪湖　小山正太郎　鈴木良治　川上淳花　牧野虎雄　富樫寅平　佐藤哲三　高村真夫　佐藤哲三郎　清水敦次郎　安宅安五郎　相馬其一　阿部展也　千原三郎　新保兵次郎　大桃寛　桑原実　西脇順三郎　矢部友衛　田中道久　小島清雄　竹谷富士雄　荒井一郎　小野末　笹岡了一　星襄一　高橋信一　蕗谷虹児　川上四郎〉

なお「総説・近世から現代に至る越佐の画人山脈」、作家略伝、公的機関美術館所蔵先が掲げられる。

『越佐書画名鑑』（一九九三新潟県美術商組合発行　荒木常能編）　作家の掘り起こしを狙いとした文字通り書・画家の略歴を一段と多く収める。日本画・洋画・書のジャンル順に各々を出身市町村別に並べている。県外出身者でも定住した人物等を一部収め、また著名なものについては作品写真も入れている。作家名索引と雅号索引を付し、今後調査を要する人物も列記している。

『新潟ゆかりの文人たち　杖のとめどころ』（一九九二考古堂発行　谷川敏朗著）　江戸期から昭和まで来市人物も含め八十八人（一人二頁）の詩歌や逸話を簡述している。古い絵葉書等を用いた挿図が目を楽しませる。

『収蔵書跡解読集』（一九九七新潟市新潟教育会発行　洋装一冊）　新潟市郷土資料館に保存される書画幅の作品写真・原文読み下し文・語釈・通釈（大意）・作家略伝を掲載する。これら解題は渡辺秀英氏による。収録される書跡の寄贈者は大西正美、喜多村清子、小島康、平田義夫、藤正彦、三沢喜一郎、渡辺秀英氏。次に収められた人物を全員掲出する。**新潟市出身者**――館柳湾　五十嵐浚明　竹内式部　石川侃齋　岩田洲尾　中原栗隠　田辺衣手子　広川百鷗　富山天池　建山越山　**新潟県出身者**――阿部北溟　溝口直養　大江広海　釈徳龍　巻菱湖　長尾秋水　中沢雪城　福田義導　水落雲涛　雛田松溪　小林虎三郎　仏海上人　小林日昇　原宏平　石黒忠

悳　権田雷斧　溝口直正　井上円了　関矢儀八郎　坂口五峰　荒井賢太郎　広橋中軒　溝口直亮　丸山梧堂　新井石龍　**新潟市ゆかりの人物**――亀田鵬齋　寺門静軒　佐久間象山　小野湖山　頼三樹三郎　永山盛輝　西郷南州　海上胤平　山岡鉄舟　楠本正隆　佐々木珍龍　小原烏兎　坂部鶴丘　中田みづほ　**著名人物**――天海僧正　豊蔵坊信海　井上醉月　万元　伊藤東涯　売茶翁　伊藤伯亭　三井親和　趙陶齋　細井平州　柴野栗山　村田春海　頼春水　三枝愚庵　大窪詩佛　伊藤弘済　亀田綾瀬　篠崎小竹　梁川星巌　林檉宇　林則徐　生方鼎齋　近藤芳樹　藤田東湖　藤井竹外　岡本黄石　穂積重胤　大橋訥庵　古賀茶渓　森春濤　大沼枕山　岡田篁所　秋月胤永　玉乃世履　江馬天江　安田老山　大久保利通　松本良順　菅原白龍　林学齋　金井之恭　大鳥圭介　東久世通禧　巖谷一六　榎本武揚　三条実美　藤沢南岳　野村素軒　永坂石埭　大内青巒　物集高見　乃木希典　河野広中　南条文雄　島田三郎　日下勺水　鈴木雅之　元田肇　八代六郎　高田竹山　大口鯛二　武藤山治　一木喜徳郎　李完用　入江為守　梶田半古　高階瓏仙　青木月斗　橋田邦彦　比田井素子（小琴）　松村英一　相沢春洋　松本芳翠

『越佐文人の軌跡』（反町茂雄文庫目録第一集　一九九四長岡市立図書館発行　洋装一冊）　本県出身で古書業界の第一人者であった反町茂雄氏が昭和五十一年から長岡市に寄贈した郷土資料三〇一三点より二二五点を選び紹介・解説をしたもの。資料は軸・錦絵・刊本・手稿・古地図・書簡等多岐にわたるが、上杉謙信から鈴木牧之、山田到処、河井継之助、草生鉄蕉等地元にゆかりの人物遺墨をたくさん含む。写真版とその釈文・概要を掲載する。

『越佐工芸家名鑑』（一九八四新潟県美術商組合発行　洋装一冊）　序文に「編集の目的は県内の故人工芸家で有名作家と同時に、秀れた作品を残し乍ら忘れ去られて行く無名作家等の名を今のうちに書き残すことです。」とある。当時現存作家の略歴も併載する。彫塑・陶芸・漆芸・染織・金工・木・竹芸・硝子・七宝・人形・刀剣・鐔の各部を設け、若干グラビアを付す。五十音順人名索引あり。

人物伝記を中心として

『新潟古老雑話』（一九三三新潟温古会発行　鏡渕九六郎編）　古稀以上の百老を訪問し各人につき一、二話を聞き取り一冊にまとめたもの。第十編に「人物」の項目があり、他にも多く当時文苑の貴重な人物史を点描する。「予不幸内障眼に罹り将に挫折せんとせしが知友近親の奨励により筆を続け専ら見聞の正確を期し年代の誤り無きに留意し以て江湖に伝へんとす。昔時の出来事は殆ど網羅せざるなし、要するに此書幸にして新潟の時代精神を物語る一小野史ともならば洵に編者の本懐とする所也、以て序となす」なる編者鏡渕氏の自序によって本書の性格が浮彫になろう。氏は上大川前通九の人、医家で、盲学校創立に尽力。新潟市日和山共同墓地に眠る。復刻（一九九三新潟雪書房発行）が行われ、蒲原宏氏により「『新潟古老雑話』の編者鏡渕九六郎（一八六九―一九四〇）という人」の解説が加えられた。

『新潟の町　古老百話』（一九七四新潟日報事業社発行　沢村洋編）　古老の見聞録で前書の当時現代版を意識した編集。

『郷土が生んだ百人　越佐人物小伝』（一九八五新潟日報事業社出版部発行　川崎久一編）　故人に限り一人三頁の小伝ながら、上中下越全県にわたり珍しい人物史も折々拾遺する。BSN新潟放送ラジオ「ふるさと散歩」で週二回一年間「越佐人物ひとくちばなし」と題し放送したものに手を加え一冊にした。川崎氏は刈羽生で著書に『小林存伝』『各駅停車全国歴史散歩』等ルポルタージュに基くものがある。

『越佐が生んだ日本的人物』（全三冊　一九六五～一九六七新潟日報社発行）　タイトルに魅かれるが、看板通りに各界で活躍した人物を取り上げ、その分野の研究者が分担執筆したもの。登場人物

を列挙する。〈第一集――竹越与三郎　井上円了　本間俊平　青野李吉　大竹貫一　山本五十六　長谷川泰　高野仁兵衛　大倉喜八郎　大橋新太郎　藤縄英一　小川未明　前島密　相馬御風　小林虎三郎　北一輝　千石興太郎　堤清六　益田孝　小山正太郎〉〈第二集――會津八一　市島謙吉　山本悌二郎　石黒忠篤　本間雅晴　吉田東伍　小山作之助　入沢達吉　小野塚喜平次　坂口五峰　青山杉作　齋藤博　土田麦僊　牧口常三郎　司馬凌海　石山賢吉　安孫子久太郎　今井藤七　小林富次郎　村田文三〉〈第三集――長谷川天溪　鈴木虎雄　建川美次　有田八郎　高島米峰　小金井良精　杉本鉞子　三遊亭円歌　内藤久寛　中川清兵衛　小林古径　増田義一　建部遯吾　伊藤誠哉　藤蔭静樹　猪俣津南雄　長谷川海太郎　土田杏村　小原直　佐々木象堂　藤沢利喜太郎　伊藤道海　日比谷平左衛門〉　復刻（一九九四新潟日報社・限定一〇〇〇部）が行われ、入手し易くなったことは有難い。

『新潟県人物誌』（一九一八越後会発行　三神正僚編）　石黒忠悳、大倉喜八郎題。萩野由之、坪谷水哉序文。「故に現代諸名士の事蹟も一々録して後世に伝ふるに非んば頓て埋棺と共に其名を没し、久からずして知る者無きに至らんとす。是れ新潟県人物誌を編述し、越佐両州に於る現代名士の性行と功業とを不朽に伝へんとする所以なるべし。」と坪谷氏の序にある如く、現存名士を五十音順に収録した点が特色で、少し前のことが煙滅して伝わらない世にあってこれらの記載は貴重な資料となろう、といわれた言通りになっている。副題は「県勢及実業大観」、全九九一頁。

『北越名流遺芳』（一九一八巣枝堂目黒書店発行　今泉鐸次郎著　和とじ全三冊）　牧野忠篤、橋本獨山、高橋翠村、吉田東伍、建部遯吾、市島謙吉、増村朴齋、江部虚舟、丸田訊齋等の題字・序文を備え、全面風流心溢れる各家の書画挿図を飾る。ほぼ同年代に編集上梓された『北越詩話』が、文士の詩の紹介とその評価に力点が置かれたのに対し、本書は詩書画俳人工芸家為政者僧侶等の文芸的技量の発掘に努めているところに、敢えて言うならば、北越文人研究の双璧である両書の差違がある。今泉氏は木舌と号し「東北日報」「長岡日報」主筆を務め、のちには長岡市議、県議に当選、一部坂口五峰に重なる人生を送った（一八七三～一九三五）。復刻版（一九七七文献出版発行　洋装一冊　限定五百部）が刊行されている。

『北越詩話』（一九一八目黒書店　坂口五峰編著　洋装二冊）　前書と並ぶ本県文人研究に不可欠の道標というべきもの。越人で漢詩をよくした者の事績と遺作を全県的に博捜した内容で、当時教養を大切にする人は大抵詩を作ったので、詩人のみならず多面的な分野の文士を含んだ記述となっている。

五峰は生前、衆議院議員・憲政会新潟支部長・新潟米穀取引所所長・新潟新聞社長等多くの華々しい肩書を有したが、加えてやはり早熟の才を発揮した漢詩の方面でも当然大きな足跡を遺した。彼の作詩は『五峰遺稿』（一九二五年刊）に嗣子献吉の手でまとめられ、他、人柄を偲ぶものに『五峰餘影』（一九二九年刊）がある。不朽の名著はその後二度復刻され、二度目（一九九〇国書刊行会）のものには人名地名書名索引と「『北越詩話』成立の過程」（坂口守二記）を収めた別冊を付す。

『新潟県史　江戸時代篇（下）』（一九六四野島出版発行　齋藤秀平著）　「第十集　学者・芸術家」の項（一五六～二三〇頁）と、私塾主の学系に力を置いた記載がある。

『越佐人物誌』（一九七二～一九七四野島出版発行　牧田利平編　全三巻補遺編一）

先行文献を駆使し越佐ゆかりの一万人余りの略伝を集め、五十音順に配列したもの。「昭和四十六年五月までの物故者を収録したが、明治二十四年以前に生まれた生存者の中から若干数選んで掲載した」と凡例にある。

『新潟県史・別編三　人物編』（一九八七新潟県編集発行）

「越後人物志」（一八四五丹羽思亭序・吉田楳齋編）、「近世偉人

伝」（一八七七～一八九五蒲生重章編）等他、近世近代に編集された各種の人物伝から越佐関係を抄出し活字化、また原本を影印したもの。本来なら本書に収録されるこれら資料も、個別に紹介すべき重要性を帯びた内容がある。

『越佐趣味の人々』（一九三八新潟時報社発行　吉岡金峰著　洋装一冊）　新潟県に関係を有する当時現存する趣味知名人士、その道を本職とする人々を収録したもの。文学　書道　画人　謡曲　囲碁　茶道　華道　俳人　歌人　美術工芸家　琴曲　琵琶　長唄　ピアノ　声楽　尺八　将棋　弓道　釣魚の各部を設ける。例えば「文学の部」では、「齋藤秀平　新潟市一番堀、元小千谷高等女学校長、現在郷土博物館々長、郷土史研究家で文章家」（P6）等の記載内容である。

『時代に挑んだ先駆者たち』（一九九一新潟経済社会リサーチセンター発行　久保田好郎著　洋装一冊）　センター機関誌『センター月報』に連載された十三話を単行本としてまとめたもの。「ここに登場した十三人の近代のフロンティアたちは一般的な県民性と異なり、革新的で、積極的に時代に挑み、地域や社会を変えていくことにより、近代の扉を少しずつ開けていった人達です。」と序文にある。前島密、内藤久寛、青砥武平次、川上善兵衛、岡村貢、田澤實入、国友末蔵、小林虎三郎、大倉喜八郎、大竹謙治、岡田保、大橋新太郎、大竹貫一の各氏を取りあげる。なおこの種の刊行本は近年多い。

『歴史の中の新潟人国記』（一九九七恒文社発行　佐藤国雄著　洋装一冊）　近代日本史を「人間の記録」によって描出を試みたもの。かつて『朝日新聞』新潟版に連載された文を加筆しまとめられた。「第一章　長岡藩敗走の八十里越えは日本の封建から近代への峠であった」とする見出しでは良寛、河井継之助、木村円解、石川雲蝶、井上井月、大橋一蔵、中村十作を紹介し、「第十一章　激動の『昭和』が終わり、『平成』はひかえめにスタートした」で終わる。

『越佐と名士』（一九三六坂井新三郎著並発行　洋装一冊）　荒井賢太郎、石黒忠悳、鈴木荘六、入澤達吉、山本悌二郎、齋藤博、芳澤謙吉、内藤久寛の諸氏が題詩を寄せる。坪谷水哉序文。「今茲（ここ）にこれらの偉人傑士を経とし、縣下各地の代表的名士を緯として、一千餘名を収録し、一大名鑑を編んだ所収のものは、ただこれを天下に紹介し、後世への贐となさんとするの意図にとどまらない。更にこれを修養発奮の資として第二第三の後継者を生み出し、燦然たる越佐文化時代を現出せんことを冀（ねが）ふ微意に外ならぬ。かくこそ本書刊行の目的は、徒爾でないであらう。」と著者の自序にある。「阪口仁一郎氏の追憶　市島謙吉記」（P82）「大倉喜八郎男の追憶　鈴木荘六記」（P95）等他者の寄稿あり、膨大な名士録がいろは音順に並ぶ。五七九頁。一九四二年再版八三六頁。

『近世越佐人物伝』（一八九八藤山銀太郎編）　古老の談や碑誌刻、家系譜により越人の志行の世に伝えるべきものを集め刊行した。編者藤山氏は岩船郡村上本町三六五番戸の人。和とじ一冊に一から十集の目次を立て、各伝記の記載には情報の出典を明示している。なお復刻版がある（一九九五新潟雪書房発行　限定五百部）。蒲原宏氏のペンによる「著者小伝」が付され、原著者藤山氏に関する資料が提供されている。復刻本の体裁は洋装一冊。

『舟江遺芳録』（一九一四風間正太郎著）　新潟市故人の言行事蹟百二十六人分を収録。桜井市作の発願委嘱に風間氏（号、洞門）が応えたもので名著の誉高い。「舟江」とは現新潟市の古くそして雅びな呼称。復刻（一九九四新潟雪書房発行）が行われ、蒲原宏氏により「風間正太郎（一八六九～一九二二）とその一族」の一文と五十音索引が付され便が計られた。

『越佐精忠遺芳』（一九四三大政翼賛会新潟県支部白川寅吉編並発行　洋装一冊）　勤皇の烈士先覚者の遺績を明らかにすることを狙いとした内容。竹内式部、遠藤七郎、小林政司、長谷川鉄之進、

松田秀次郎、植村貴渡、小栗美作、松田伝十郎、広川晴軒、等六十五人を収める。巻頭に若干グラビアあり。

『新潟県人物群像』（新潟日報事業社出版部編並発行　洋装全六冊）　県内郷土史家による分担執筆。類書は多いが一応全巻の内容を挙げる。**一巻「武――戦いに生きる」**山本五十六、本間雅晴、建川美次、河井継之助、上杉景勝、本庄繁長、新発田重家、上杉謙信、城氏一族　**二巻「文――筆に生きる」**會津八一、青野季吉、小川未明、坂口安吾、鈴木牧之、相馬御風、西脇順三郎、堀口大学、良寛　**三巻「駆――志に生きる」**並河成資、杉本鉞子、坂口仁一郎、前島密、小池内広、鳥居三十郎、松田伝十郎、長谷川鉄之進　**四巻「興――産に生きる」**国友末蔵、川上善兵衛、内藤久寛、中野貫一、益田孝、山口権三郎、大倉喜八郎、岡村貢、伊藤五郎左衛門、大橋佐平・新太郎、竹前権兵衛、小八郎　**五巻「究――真に生きる」**司馬凌海、吉田東伍、高橋義彦、藍澤南城、鈴木文台、井上円了、建部遯吾、大森隆碩、北村四海、高頭仁兵衛、石黒敬七　**六巻「信――人に生きる」**松平忠輝、小栗美作、川村清兵衛、三島億二郎、順徳院、日蓮、日野資朝、狩野胖幽

『文人墨客を語る』（一九三五市島春城著・翰墨同好会刊・洋装一冊）　主に江戸期、越後に限らず東西の人物伝を文墨の趣味を柱として略記した内容。越人は少ないが、著者が越後生まれということで関連記事が目につく。「伝記の委しい文人が必ずしも第一級の文人でなく、一行の伝もないのに却って立派な文人があることであった。兎角文人を伝する人は、餘りに委しく事歴を書くことにつとめて、却って眼目を失っているものが多い。實は餘りに委しく事歴を書く弊は、動もすると其人を平凡化して仕舞ふ、寧ろ多く省略して其人の真骨頂を発揮することが、却って真を写す法であるまいかと、自分は其の流儀で勝手な取捨をして百餘の文人墨客を語ったのが此書である。…」と自序に春城が述べる視点がユニークであるから、読み物としても面白い。六七六頁。

『越佐人名辞書』（一九三九村島靖雄編・同刊行会・洋装一冊）　筆者は熊本生。帝国図書館司書・新潟県立図書館長・県史編纂局勤務（M18～S11・52歳）。大正十四年稿を起こし昭和十一年まで十二年をかけた労作。市島春城・松本喜一・相馬御風・高島米峰序文。題簽春城書。辞書であるから一人物に対する記述は短いが、多くを採録したものとしてこの種の刊行物中定評がある。村島氏経歴と人名索引を付す。八四三頁。S49歴史図書社復刻。

『新潟県人物誌』（一九一八　三神正僚・越後会・洋装一冊）　石黒直悳・萩野由之・坪内水哉序。大正七年、現存者の、主に政財実業界の人物を就中顔写真入りで経歴や人柄を紹介したもの。出典がなく、つまり当人にインタビュー等をして書き上げられたような文で、ときに読み物として生彩を覚える。記述中、早大講師時代の相馬昌治（号・御風P316）いまだ在京中の様子を伝え、富取芳齋の継子・芳谷は一応画伯として紹介されているが、記事の内容は醤油醸造業家としての活動をメインにし居住は小石川区、八木朋直の養子・八木孝助はまったく実業家たる面をつづっている。巻末に大倉集古館・大橋私立図書館についてまとまった紹介文あり。九九一頁。

『越佐傑人譜』（一九三八日本風土民族協会・洋装一冊）　「昨日の越佐」「今日の新潟」「産物の新潟」「越佐傑人譜」（五十音順・二三〇〇余人）「新潟県市町村戸口表」の目次。当時各界で活躍する人物を活字で紹介するもの。

『明治百年記念新潟県先賢偉人展目録』（一九六八新潟県美術博物館・洋装一冊）　この一世紀内に在世した本県出身の業績を、遺墨・遺品を通して回顧する展示の簡便な解説書。冒頭六頁写真版。七頁より人物目次。八頁より三六頁まで生歿・出生地・出品作のタイトルを含む人物略伝。巻末に小村弐氏が「満天の星のごとき壮観」と述べられたように、珍しい人物作も出陳された模様。三八頁。

『越佐名誉鑑』（一八九二狩野栄次郎編・長岡日進社印刷・洋装一冊）　発行所は三島郡小島谷若野浦。村上義雄（号・淡堂）題字・

木宮磐根題詠・肥田野畏三郎（号・錦川）序文。名家・篤行・文苑の三項に分け人物を紹介。生・没者混在。半藤逸我（P5）・帰山雲涯（P9）・坪井子敬（P13）・益田孝（P21）・藤井宣界（P21）等。六六頁。珍本。新潟県立図書館蔵。

『新潟県人名辞書』（一九四一金子尚信編・洋装一冊）　編者は柿崎の人。村島靖雄編『新潟県人名辞書』を参考にしつつ、主に現代人について収録した内容。現代人は上越地方より郡別順に掲載し、末に古人の部を登載。

医　家

『お医者山脈』（一九七六Xレイ・ジャーナル社発行　沢田白泉著　洋装一冊）　『Xレイ・ジャーナル』（月刊誌）に昭和四十四年七月号から同四十九年十二月号に至る六十六回掲載されたものを一冊にした内容。入沢達吉山脈、竹山屯山脈、沢田敬義山脈、順天堂佐藤泰然山脈、塚本道庵山脈、杏林館熱田家山脈、杏雲堂佐々木東洋山脈、慈恵会山脈、緒方洪庵山脈等。古来漢方医に詩書画をよくした人物がおり、本県でもここにとくに紹介された竹山、沢田、入沢氏は看過出来ない文士としての存在で、かつ、多くの文士と交わりをもった人である。尚、沢田白泉氏の連載記事は、『蒲原』（継志会刊）誌上にもみられる。二三三頁。

『新潟県医学史覚書』（一九九三新潟雪書房発行　蒲原宏著　洋装一冊）　医師会関係の月報、旬報、週報に連載掲載した文をまとめたもの。「新潟県の医学の歴史は郷土史研究の暗箱であった」と帯にある如く、やはり本県医学史と郷土史とは切り離せない関係にあり、したがって医家を探ることは郷土のかけがえのない人士を知ることでもある。巻末に五十音順項目索引を付す。三〇九頁。

地区別編

『ふるさと長岡の人々』（一九九八長岡市発行）　二十一世紀への道しるべとして過去の真実を知るべく文人の足跡の紹介を行う。国際文化人、維新の群像、地方功労者、近代政治家、社会運動家、起業家、実業家、出版人、学究人、教育者、医学者、武将と軍人、宗教家、芸術家、スポーツ芸能人、文学者の見出しがあり、総計二百九十二人。一人物概ね二頁が充てられる。例えば、一五四頁「出版人」の項に今泉鐸次郎がある。人物肖像写真を載せるものが多く、人名索引と主な参考文献を備える。

『近代安田人物史』（一九八五安田町発行　安田町史別巻一）　文政二年（一八二九）から百五十余年間の故人六十七人を収録する。「『大日本地名辞書』吉田東伍（一八六四年生）保田――」というように見出しに人名と生年、出身地を各人付す。費やされる頁数は人毎に異るが、全般にわたり古老への聞き取り調査を繰り返しまとめられた労作（談話者名を多く付す）。つまり、地域の手によらねば成し得られない記載なのである。こぼれ話を五話収め、巻末に参考文献目録と人名索引あり。

『南蒲原郡先賢伝』（一九二三南蒲原郡教育会発行　武石貞松編）　高橋竹之助、松田秀次郎、大橋一蔵等十一人の事績を収める。各郷土の産んだ先人の伝記をまとめたこの種の刊行書の嚆矢と称すべきもの。一二八頁。一九八四年、月刊中越の郷土史編集室復刻版がある。貞松亡き後第二篇（一九三四年刊）が長岡の人で詩人の小池三男吉（号、聴松）の編輯により上梓された。九十人を収め二二四頁の和とじ厚冊。

『頸城と書』（一九八一北越出版発行　石田耕吾著　洋装一冊）　地域文化の中で書に注目し、先賢の遺墨と関連記事を収める。例えば松平光長、榊原政令、小栗美作、鈴木甘井、三上則義、南摩羽

峯、東条琴台、井部香山、井部健齋、木村愚山、木村容齋、中根半嶺、倉石典太、渡部健蔵、渡辺巌、増田義一、川上善兵衛、高島順作等。

『近代佐渡の人物』（一九七七佐渡郷土文化の会発刊　山本修之助編）　内容は山本悌二郎先生、放送郷土に輝く人々、司馬凌海、ふるさとものがたりの目次。類書は多いが、山本氏の悌二郎、凌海論にはひときわ熱が込められている。

『佐渡のうたびとたち』（一九九四新潟日報事業社出版部発行　酒井友二著　洋装一冊）　平成四年三月から五年十一月にかけて新潟日報佐渡版に連載された五十五回分を補筆しまとめたもの。五十二人を取り上げ、鈴木重嶺、山田花作、渡辺湖畔、北一輝、藤川忠治等の他、地方に埋もれつつある貴重な趣味人の経歴や遺墨を伝える。一九〇頁。

『新潟市史』（一九三四新潟市役所発行　上下二巻　一九八八国書刊行会復刻）　下巻第三章「人物」に収録された新潟関係のものは、**勤皇家**――竹内式部　**善行**――玉木屋大隅　若狭屋常安　嶋垣宗兵衛　同隼人佐　大井小十郎　宮川縫殿左弥左衛門　齋藤吉右衛門　伊藤新左衛門　伊藤多右衛門　佐藤理右衛門　高橋次郎左衛門　三村雄之助　江口善平　真野栗川　橋本善松　松浦久蔵　荒川太二　清水芳蔵　藤田文二　齋藤喜十郎　齋藤金衛　鍵富三作　小林たか　桜井市作　安倍九二造　八木朋直　中川立庵　伊藤仁太郎　鏡淵意伯　佐藤荘松　高橋助七　**良吏及為政家**――田辺忠蔵　石附五作　鈴木長蔵　坂口仁一郎　鳥居鋕次郎　山崎利吉　坂本有隣　**教育家及び医家**――寺田徳裕　竹内樸卿　三浦宗春　若杉喜三郎　池原康造　竹山屯　長谷川寛治　五十嵐巳之松　**漢学**――田中克明　片山北海　岩田洲尾　真野碧淵　館柳湾　坪井良作　藤井久三　金子長吾　**歌人**――玉木勝良　松木満志女　名所時雨　田辺衣手子　日野資徳　田中小稲（お）　山田穀城（よしき）　**俳人**――吉川豈羨　露柱庵一宇　北村七里　真野右之　長野鷺舟　長野此柱　松蘿庵風月　片桐鼎湖　月窓庵鬼磨　廣川百鷗　**書家**――興雲　巻菱湖　白井方行　**画家**――谷等閑齋　呉（五十嵐）浚明・同片原・同竹沙　附雪槎北汀　榕堂　白井華陽　鉄龍　大塩詢　石川侃齋　梅津幸助　井上文昌　窪田柳塘　五十嵐泰葺　水田宋紫峰　志賀北洋　本間翠峰　行田魁庵　長井雲坪　大倉雨村　本宮柳所　**算数家**――津平　**沙門**――入玄　円策　順崇　泰禅　大乗　巨堂　円勢　日昇　**義人**――涌井藤四郎と須藤左次兵衛　**著述家**――小泉其明　小泉蒼軒　風間正太郎　岡田有邦　**工匠**――寺井栄七　鈴木弥三吉　岡田旭堂　青山碧山　**謡曲**――吉田定太郎　**遠洋漁業家**――関矢儀八郎　**力士**――鷲ケ浜　である。各人物略伝には殆ど出典が記されるが、中には本書でしか知られていない人士も含まれている。竹内式部、片山北海、津平、等は割と多く紙幅をさいている。

『三條先覚事略』（一九二七三條町役場発行・洋装一冊）　「三条文人」と一般に区別して称されるように、当地は名だたる人を輩出した土地柄で、本書はそれらの事歴紹介書の嚆矢というべきもの。五十嵐華亭・石黒宇宙治・岩崎又造・今井藤七・長谷川嵐溪・日圓上人・日明上人・日舜上人・細井吉蔵・外山丈芭・渡邊甚八・加藤市次郎・帰山雲涯・笠原文平・高野毅・行田雲涛・村山半牧・孝女くに・栗原信秀・巻梧石・松尾與十郎・深澤伊之助・小林勝清・近藤耕造・酒井安兵衛・佐藤玄雪・六十一世遊行上人・三上春行・宮島利平・渋谷善助・日比谷平左ェ門・廣川長八・森山信谷の三十三人を収録する。先行文献の引用に終始する内容ではなく、オリジナルな情報を収めるところに本書の魅力がある。七二頁。

『三条人物伝』（一九九二緑川玄三著・三条人物伝刊行会・洋装一冊）　長谷川嵐溪・村山半牧・村尾与十郎・佐藤玄雪・外山丈芭・栗原信秀・帰山雲涯・渋谷善助・日比谷平左衛門・今井藤七・岩崎又造・石川雲蝶・松川藤陰・笠原文平・三条左衛門尉定明・深沢伊之助・栗林五朔・三条と良寛・堤清六・鈴木荘八・禅僧有願の人物を一人三十～五十頁にわたり記述。計二十一人。六四九頁。

『三条の人物』（一九七八西方藤七・三条人物研究会刊・洋装一冊）　前編に紹介した『県央の人物』の元版。二〇〇頁。

『妻有郷人物伝』（一九九四週間とおかまち社刊・洋装一冊）『週間とおかまち』（H2・3・2～H5・12・24）に掲載されたものを一冊にまとめる。十日町市（二〇人）・川西町（七項目）・津南町（六人）・中里村（四人）の妻有郷を収載。「妻有の蕉風俳諧先駆者　上村山之」「十日町画壇の父　新井文圭」（以上十日町）、「滝谷琢宗禅師」（川西町）、「日本画、土佐派の巨匠　津端道彦」（津南町）等の略伝を地元の郷土史家が分担執筆。五一五頁。

『妻有の人物史Ⅰ』（一九九〇十日町市博物館・洋装一冊）　幕末から明治の人に限定し、河本杜太郎・服部泰庵・宮本茂十郎・尾台榕堂・高橋茂一郎（号・翠村）を収録。四十頁。

『妻有郷の人物史Ⅱ』（一九九一十日町市博物館・洋装一冊）根津五郎右衛門・蕪木八郎右衛門・木村瀬平・関口雪翁・上村山之・根津桃路を収録。四二頁。

『とちおと人物』（一九七四栃尾市役所・洋装一冊）　「広報とちお」（S45・7）に掲載されたもの五一人分をまとめた内容。富川大塊・魚住荆石・諏佐長山・琰眉和尚等。一一六頁。

『栃尾と人物』（一九九二栃尾市教育委員会・洋装一冊）　前書を増訂し九一人分を収録する。遠山夕雲（P218）・内藤鋹策（P231）等。巻末に年表と人名索引あり。二五九頁。

『佐渡人物志』（一九二七萩野由之・佐渡郡教育会刊・洋装一冊）　慶長より大正期までの佐渡出身者を善行・良吏・漢学・医学・数学・音韻学・蘭学及地理学・神道及歌文・連歌及俳諧・書画・産業及技芸・義・侠・沙門・女流・雑学の項を設けて活字により紹介。著者は東京帝国大学名誉教授・大正十三年二月没。その後関係者の手によって遺稿が本書のようにまとめられた。島内、一芸一能の世に伝わるものを悉く採録した観がある内容。三四五頁。

『佐渡先哲遺墨』（一九二二萩野由之編・博文館刊。帙入一冊）　コロタイプ精印による写真版を大きく取り扱った内容。萩野氏が三四十年かけて集めた佐渡人の遺墨三〇〇余を明治十七年帖に整理。最初は百人に限定し、一人一跡を収める。後、再び追加し別冊を作り各々甲・乙本とする中、選んで一帖として印刷したのが本書。二一二幀・一九二人分・一五〇部刊行。巻末に簡便な伝記を付ける。

『郷土先賢の遺芳』（一九五五大西総治編・西越村公民館刊・洋装一冊）　三島郡・小木の城山と出雲崎湾に抱かれた純農村・戸数一、二〇〇の西越村内の一技一芸に秀でた人物を収録。筆者は地元教育家。一四六頁。稀覯本。

『佐渡人名辞書』（一九一五本間周敬編・畑野渡辺書店・和とじ一冊）「儒家・詩文」「釋氏」「医家」「国学、和歌、連歌」「俳諧、狂歌」「書家」「画家」「武技」「義民」「工芸」「事業」「雅楽」「畸人」「雑」の他、島外の人物を「外伝」としてまとめる。著者本間氏（号・洒川）は大正二年十一月新穂村での先哲遺墨展に感動を覚え、以来、人物の伝記を集めること四百五十余人にのぼった。記述は類書にない特色を発揮し、「書家」の項を立て二四人を挙げるなどは他書には珍しく、「画家」は別に三十人を収録する。一一一頁。

『定本・佐渡の美術』（一九九七久保尋二監修・郷土出版社刊・洋装一冊）佐渡出身の芸術家の作品を総カラーで掲載。作家略伝および作品解説を付す。**日本画**――狩野胖幽・本間探兆・石井夏海・石井文海・後藤春兆・酒井珠津・葛西磯山・土田麦遷・安田半圃・恩田耕作・中川魁大　**洋画**――本間勘弋・三国久・北嶋吾二平・近松行雄・本間勝太郎・小林哲夫・五十嵐二朗　**版画**――笹井敏雄・齋藤正路・高橋信一・原俊一　**彫刻・工芸**――渡辺藤一・親松英治・林昭三・本間琢齋・宮田藍堂・佐々木象堂・小管竹堂・本間一秋・黒沢金太郎・伊藤赤水・三浦常山・三浦小平二　以上の作家を収録。一六七頁。

『下越人物誌』（長谷川幻亭著・一九四〇・下越通信社・洋装一冊）　新発田・北蒲原郡一帯の昭和十五年当時活躍した人を集めた

もの。文芸に関する記述は少ない。一一五頁。

『小城下文人伝』（一九九二磯野繁雄著・洋装一冊）　主として『北越詩話』に掲載される糸魚川出身の文士の事績と漢詩文との紹介を行う。漢詩には著者による読み下し文が付されている。松山琴谷・松山味間・松山家をめぐる人々・天保期の糸魚川俳壇・竹山穀山等々。三八二頁。

『ふるさと史話』（一九七六ふるさと史話刊行会　権平英志著）　五泉市を舞台として活躍した記録がまとめられる。五泉人物史安倍玄的、泉圓、川島一谷、千葉範造、歌川兼太郎、松田彦平、二宮良吉、式場益平、落合徳之進、大江広海の他、地元文化財を収録。

『増補改訂版東蒲原郡人物志』（一九八〇現代思想社発行　神田行雄編著）　私家版冊子（一九七七年刊）を改訂し、当時現存者二十三人と物故者三十人とを収める。寺田徳裕（P205）西郷四郎（P265）薄益三（P314）長谷川耕南（P407頁）等に注目したい。

『県央の人物』（一九八九野島出版発行　西方藤七編）　三条、燕、加茂、吉田、分水、寺泊、田上、栄、弥彦、岩室、下田の三市五町三村県央地域に関する多くの人士の略歴を簡介する。荘園ができた頃までの人物、戦国期の人物、封建制の人物、商売自由期の人物、生活圏設定期からの人物――の目次があり、五十音索引を付す。『三条その人物』（一九七八年刊）の増補版。

『新潟県人物百年史　頸城編』（一九六七東京法令出版発行　新潟県上越人物史研究会編）　政財界企業家が多いが、以前のこれら人士には筆をよく執った人物もまた多かったということである。

『西蒲原郡志補追人物篇』（一九八一市川吉五郎発行　栗原九十九編　洋装一冊）　「私は刈羽郡産で本郡産では無い。本郡の水を飲み始めたのは明治三十五年で西白根に居を構へた時である。居ること四ケ年一旦去って五泉に行きしが明治四十一年再び本郡に舞戻り吉田に居住すること既に三十有余年本郡に在住すること実に前後四十年に垂々としている。」との編著者の弁。その栗原氏は明治六年二月刈羽郡高浜町大字椎谷に生まれ、同十九年三月、新潟尋常師範学校卒。元吉田尋常高等小学校々長。昭和二十一年七月、七十四歳にて没す。発行者市川氏は明治三十一年一月三十一日西蒲原郡弥彦村に生まれ、大正六年三月新潟師範学校本科第一部卒業後、県内郡内で長く教職に当りうち二十二年を校長として務める。この人が著者栗原氏の原稿を整理・補充しそして自費出版したものが本書である。岡真須徳氏の編集業務の功も大きい。一部現在の新潟市に編入された町村も含め、郡内広域にわたり三百名以上の特記すべき話題を収める。掲載順は町村毎にまとめられる。巻末に五十音順人名索引と参考資料を列挙する。労作というべきもの。三一一頁。

『明治百年記念　郷土百人一首』（一九六九新津市役所発行　田村順三郎編　洋装一冊）　中蒲原郡もしくは郡内に因縁のある者の詩歌一首ずつを収める。詩歌の紹介は活字ながら各々出典を明記し、作家の略伝を付す。巻頭に鈴木重胤、坂口仁一郎、高橋泥舟、小林存の筆跡をグラビア掲載する。趣味家の作った本の体裁。八六頁。

『粟生津村先哲傳』（一九三五序文・和田淡村編・一九八八吉田町教育委員会復刻）　鈴木文壹を筆頭に当地の先賢物故者の伝記を地元名家和田氏（本名悌四郎・粟生津村教育会長）がまとめ、鷹雄徹氏が謄写印刷の労を執ったもの。洋装一冊、一一四頁。

『柏崎人物誌』（勝田忘庵記）　『柏崎日報』紙上に掲載されたもの（一九五四・八・四より一〇九回連載）。この他忘庵には地元柏崎文人文化を書き留めたものとして「こんじゃく柏崎」（一九五七・八・二五より九十回『柏崎日報』連載）、「柏崎を舞台の役者」（一九五一・一・七より四十八回『越後タイムス』連載）、「在りし日の旦那衆」（一九五二・一・一より二十二回『越後タイムズ』連載）等多くがある。著者勝田忘庵（一八七六～一九六二）は柏崎生まれの書家・篆刻家。地元新聞数種の創刊に関与し、その主筆を務めたジャーナリストでもある。

『市立図書館月報』所収**「郷土の人と図書館所蔵資料」**（柏崎市

立図書館発行）　一九九一年四月二七三号から一九九六年二月三二八号まで掲載される。毎号表紙に柏崎人物紹介と蔵書蔵品資料を列記、遺墨や遺稿も写真で紹介を行っている。この図書館の所蔵する郷土資料は地元有志よりの寄贈で膨らみ、県内屈指の質・量を誇るが、館のスタッフがそれをよく整理し、一般の利用の便をはかっている一端がこの連載によく表れている。

『まち・むら・風土と人』（巻町双書三八集――巻町教育委員会　一九九八年刊・洋装一冊）　元巻町郷土資料館長・石山与五栄門氏が『あげは』（四八号～七七号）に連載執筆した「まち・むら・風土と人」をまとめたもの。一七〇頁。

展示図録等

『新潟県美術博物館所蔵　県人作家秀作展図録』（一九七一年三月一日～三月一四日会期　主催新潟県美術博物館　洋装一冊）　日本画・洋画・彫刻・工芸・書跡の各分野で注目すべき作家の作品および略歴、作品の概要を収める。特別出陣①「良寛　あめや看板」②「信濃川洪水絵巻」③「北越詩話文人書画貼混屏風」（六曲一双）。「新潟県美術界の変遷」（小林理一記）を付す。全五八頁　③は『北越詩話』の著者五峰が執筆に際し同書掲載の文人やその他関係人物の資料を収集し屏風に仕立てたもので、九十一人九十四点の筆跡が見られる。

『木村秋雨翁　収集資料集（俳諧資料・著名家墨蹟・歴史資料）』（一九八三糸魚川市教育委員会編並発行　洋装一冊）　木村秋雨氏は本名淑澄。得度し孝禅と名のり、また秋雨と号した。明治三十九年十一月中頸城郡三郷村（現上越市）に生まれる。八一の書生となりそして雲洞庵で出家し、ライフワークは本県俳諧史研究。相馬御風の良寛研究を陰で支えた人物。昭和六十三年十月、八十一歳没。本書にも俳人遺墨で珍しいものを含む。六六頁。

『糸魚川市歴史民俗資料館蔵　近世俳人墨蹟展　宗鑑・芭蕉・一茶等』（一九八九糸魚川市教育委員会発行　洋装一冊）　芭蕉が糸魚川・西浜を通り三百年を記念した展示図録。相馬御風収集資料も併陳。釈文と作家略伝を付す。六三頁。

『特別展図録　越佐の人物展――木村秋雨翁蒐集資料を中心として――』（一九九一糸魚川市教育委員会発行　洋装一冊）　僧侶の遺墨に珍しいものを含む。釈文および作家略伝を付す。五三頁。

『糸魚川市歴史民俗資料館所蔵　木村秋雨翁収集資料目録』（一九九二糸魚川市教育委員会発行　洋装一冊）　蔵書の代表的なものや覚書き資料も含む。とくに書簡（差出人・受取人共に秋雨ではない）リストは今後注視すべき存在といえる。巻頭にグラビアあり。二七二頁。

『館蔵品図録』（一九八八財・北方文化博物館編集並発行　洋装一冊）　館内常陳の作はもとより、多く県人作家の書画作を掲載する。カラー図版多し。簡単な解説を付す。一三九頁。

その他

『越佐人物誌　名家系譜』（一九八六野島出版発行　牧田利平編）　『越佐人物誌』編集の副産物とでもいうべきもの。かつては家柄を重んじ名家同士の婚姻関係が保たれた。系譜としてそれら一三九家のつながりを明らかにしようとしたのが本書で、意外な家同士が血縁を持つ有様が随所に認められ興味深い。A4判大冊。

『郷土夜話　越佐の微苦笑　郷土人物異風景』（一九三六新潟毎日新聞社発行　星一路著　洋装一冊）　「ところで微苦笑は、いうまでもなく表情の一つで、然かも、それは多くの場合、甚だ、デリケートなものを持っているのであります。越佐の微苦笑は、だから、越佐及び越佐人の持つ表情の、一端の現はれで、なければなりません。だが、筆者の禿筆は遂に、その表情の微妙さを深刻に、描き出

し得なかったことを遺憾といたします。」との著者の自序にかえての文あり。目次に目を移すと、「二　越佐出身の地方長官列伝」「三　越後美人盛衰記」「五　大臣級から陣笠まで」等があり、その逸話や行状の片鱗を他書とは違った視点から興味津々に捉えている。

『會津八一と越後の文人』（一九八一新津郷土誌料研究会発行　坂口守二著　洋装一冊）　八一を意識的に縦軸として捉え、文化的風土や文人の系譜を探ったもの。実証的考察姿勢に基き、各地に資料を博捜してまとめた内容には、新知見が多く含まれていた。第二章「越後的文人とその土壌」や三章以降、市島春城、坂口五峰、原宏平、式場麻青、小林存、桜井天壇、山崎串川、坂口献吉、等の動向を詳細に追う記述あり。三三四頁。

『新潟県文学全集』（一九九五～一九九六郷土出版社発行　第Ⅰ期洋装全七冊・第Ⅱ期全七冊・資料編一冊）　うち第Ⅱ期六巻に「随筆・紀行・詩歌編　詩・俳句編」、第Ⅱ期七巻に「随筆・紀行・詩歌編　短歌・川柳編」を収める。新潟ゆかりの歌人や俳人の代表作と略歴を収める。中でも極く近年の物故者や現代作家の経歴も一部掲載している点は、今後良き資料になると思われる。

『新潟県大百科事典』（一九七七新潟日報事業社出版部編並発行　初版上中下別巻　一九八四復刻デスク版　洋装一冊）　県内各地域各分野の調査研究の集大成を目的として企画された。県下から選ばれた執筆者により文字通り百科的内容を呈す。ただし諸データや記載事項は今からみれば相当古いものを基礎資料として用いているので、使用上注意を要す。年表・分野別索引・五十音別索引を巻末に備える。デスク版本文二一九三頁。

金石編

石碑資料の性質は、大むね不朽性を帯びていることにある。長い年月外部の風雨にさらされながら、石質のものならばこその耐久性を示している。本県の場合、その歴史の古さはせいぜい江戸後期で俳諧資料が多い。明治に入ると爆発的な建立ブームを迎え、目的は個人顕彰を大半とし、文章・書者・刻工ともに名家によるものを各地に散見する。石碑の見どころとしては、

- ○刻された書・文字の美的魅力を鑑賞する。
- ○碑文の内容を読み史的・文学的・民俗学的内容を読みほぐす。
- ○工芸品として石彫を味わう。
- ○拓本を採って芸術品として鑑賞する。
- ○碑文の内容を調査する際、他所で原寸大で改めてみることが出来る。
- ○建碑の背景を探る楽しさ。誰が発願しどのような経緯で建立されたのか、を調べる。

およそ右の点が石碑に対峙する際の視点である。資料としてこれを取り扱う際とくに注意すべきは、先述の不朽であるということで、それだけ後世に及ぼす影響が大きいわけである。応々にして建立者は思い入れをあつくして事に当るのだから、性質上美文（逸美）になりがちである。また万一間違えが文章にあったとしても、一度建てられれば改刻されることは余程のことでなければ行われない。したがってうのみにしてはいけないのである。例えば、『北越詩話』の如きにしても、略伝を調べる手立てとして碑文によった箇所が実に多い。しかもそれは、編者五峰が筆写する間に誤記がされたり、他者からの提供碑文を原物に直接当たらないで、そのまま用いた例が山のようにある。

しかしながら、だからといって、石刻資料を否定しようというわけではない。出来得るなら、伝世する文献資料とよく照応して内容を吟味し、活用すればよいと考えるのである。

考えてみれば、紙に書かれた文献資料の保存例が一般の目に触れることは少なく、伝わったとしても誰もがその存在を知り使用可能ということではない。この点、石碑はいつ誰によっても所在地に行

けば内容を直に確かめられるのであって、だからこそ資料として一般に親しまれているのである。

『越佐のいしぶみ』（一九七九新潟拓本研究会編・学生書房発行・洋装一冊）　拓本を通じての先人文化の掘りおこし、拓本芸術の伝承普及を目的とする「新潟拓本研究会」は機関誌『いしぶみ』を定期的に刊行し、これまで十一号がある。本書はこうした会の人々が毎日新聞新潟版（S51・4～S52・4）に掲載執筆したものを一冊にまとめたもの。上中下越百種の石碑の所在地（略地図入）、拓影、原石写真、碑文釈文および碑のいわれや概要を毎々掲載している。続編の編集も近年準備されている。「あとがき」に、「一基の〝いしぶみ〟は私達にその碑の人を教え、その人の生涯、作品、書蹟なども示してくれる。また昔あった事跡を知らせてくれる。従って詩歌、俳句、書道、民俗、歴史などの研鑽、錬磨にあたる人には、見逃してはならない資料であり、先人より享け継ぎ、後人に伝える大切な遺産と言うべきであろう。建立した人々は、秀れたもの、真実のこと、記念すべきことを金石に留めて、未来永却を願って勧さずにはおれなかったのである。碑は本来、人のため、世のため、後人のため、後世のためにあるもので、たとえ己の記念のためであっても、所詮は世のため人のために帰すべきものである。遺し遺され、また遺す、これが碑の真の姿だと思う。近年ややもすればこの本来の姿を離れて、ひとりよがり、粗製乱造の風も見えることは、大いに戒むべきことと思う。……」とある。二一七頁。

『亀田の石文』（一九八九橋本長一編・洋装一冊）　亀田町文化財保護審議委員であった著者が昭和六十年八月以来十六回にわたり「広報かめだ」に連載した石碑紹介を増補し、町内五十一基を収録したもの。所在地と碑文、石碑写真、碑の寸法、および解説文を載せる。この地は俳諧文化の盛んなところで、佐藤暁華・浜口今夜・高野素十・玉木豚春等の句碑が建つ。八五頁。

『三条のいしぶみ』（一九八八三条郷土史研究会編・洋装一冊）　嵐北・嵐南・井栗・本成寺・大崎・大島の各地区に分けて多くを収載。三条市内は神社仏閣の多いところで、江戸・明治期建立のものが目につく。鈴木荘六（P12）・村山半牧（P28）・村山遯軒・村山半山（P30）・五十嵐華亭（P48）・長谷川嵐溪（P52）・広川松五郎（P103）・石川雲蝶（P157）・松川藤陰（P179）等興味深い人物の墓碑をはじめ、良寛関係や地元文士の詩歌句碑がある。所在地・石質・寸法・筆者・建立者・建碑年・碑文・その読み・解説・写真を掲載する。三四八頁。

『柏崎のいしぶみ第一集』（一九七〇山田良平著・洋装一冊）　『柏崎日報』に連載された「碑は語る」に追補してまとめたもの。地区毎に碑の概要と写真、多くの挿図を載せ紹介する。柏崎は江戸期以来著名な文人の往来が多く、それらが撰文書写した碑が各地に見られることを本書によって教えられる。商家や土地の集積による旦那衆は、自己の先祖一族を顕彰する碑文を競って建てたのである。来越文士の他、山田霜筠・山田鏡古・丸田桜亭・丸田尚一郎・吉田正太郎・勝田忘庵等地元文士の個性的な書が石文に残る。二一三頁。

『分水町の文化財　いしぶみ編』（一九七四分水町教育委員会・洋装一冊）　良寛関係の比較的古い石碑が伝わるのと、大河津分水工事に関するものに著名なものがある。遍澄歌碑（P5）・比田井天来書信濃川治水紀功碑（P14）・大窪詩仏「禹に勝る業や盛りの花桜」（P20）・富取芳齋書碑（P34）・良寛乙子神社詩歌碑（P48）・良寛「たくほどはかぜがもてくるおちばかな」（P49）・萬元上人墓碑（P51）・池田鷲村書「夕ぐれの岡」（P56）等全四一基の所在地・筆者・建碑年・建立者・寸法・写真・碑文の読み下し文等を載せる。六一頁。

『与板町文化財　四集いしぶみ』（一九八八与板町教育委員会・洋装一冊）　明治の三筆・中林梧竹書「八尾進齋先生碑」（P14）・地元先人顕彰を目的とする藤井界雄碑（P12）・齋藤赤城碑（P13）・以南と良寛、由之関係は九基を数える。現在河川公園にはたくさん

の良寛関係碑が建つものの、皆機械彫による肉筆と雰囲気を異にする出来であることは残念だが、本書に収録する碑は名工・藤井留吉刻による「しほのりのさかはなのみになりにけり　ゆくひとしぬべよろづよまでに」（塩ノ入峠歌碑・P74）等佳刻を複数含む。七十基の所在地・著者・建立者・大きさ・碑文・写真・概要・拓影等を載せる。九四頁。

『新潟いしぶみ散歩道』（一九九二新潟市教育委員会・洋装一冊）　新潟市内に数多くある石碑のうち、文学碑・句碑・歌碑に類するものを九七基収める。市民グループ「石造物を楽しむ会」のメンバーの調査が基となって本書はまとめられた。吉田松陰の来越時の詩碑（P1）・會津八一書碑や吉井勇・高浜虚子・坂口安吾・北原白秋・中林梧竹・相馬御風・高野素十・吉野秀雄等よく知られる文士の他、竹ノ内清淵・小林存・八木朋直等地元文人の書や、堀と柳の水の都と称された風光を詠んだ味のある内容の碑文がめじろ押しとなっている。所在地・大きさ・建碑年・建立者・碑文・写真・概要を載せる。七五頁。

『長岡いしぶみ』（一九八七長岡市拓本同好会・洋装一冊）　同好会十年の歩みをまとめたもの。会員寄稿による採拓日誌や回顧録。三五頁。

『新津の文化財　一・二集いしぶみ編』（一九七七新津市教育委員会・洋装一冊）　幸清水の碑（秋葉）・建部遯吾撰書感恩仰徳碑（秋葉）・吉田東伍墓碑（秋葉）・桂家関係（秋葉・正法寺境内）・小泉其明墓（市之瀬）・西郷隆盛書「敬天愛人」（小戸上組）・中野貫一成功碑（金津・広橋足穂書）・日本石油会社碑（金津・日下部鳴鶴書）・等々。一集は三十基・五二頁。二集は四十基・六一頁。所在地・筆者・建碑年・建立者・大きさ・碑文の読み下し文・写真・概要を載せる。

『新津のいしぶみ――歴史のロマンを歩く』（一九九六郷土に親しむ会・洋装一冊）　「あなたも感じてみませんか、歴史と文化の香りを」をテーマに集まった「郷土に親しむ会」により、前掲『新津市の文化財』を底本に用いて実地調査の結果、改めてまとめられたもの。八二基の所在地・筆者・建碑年・建立者・大きさ・碑文と読み下し文・写真および概要を表記する。坂口安吾「あちらこちら命がけ」（本町二）・良寛歌碑（秋葉公園内）等新しく建立されたものを含む。一三三頁。

『佐渡碑文集』（一九五七抽栄堂山本半蔵編・山本修之助刊・和とじ一冊）　佐渡島内碑銘のうち比較的古いもの、著名なもの八十二基全文に句読点・返り点を付したものを載せる。末尾には島外にある佐渡人の碑銘―例えば「大久保湘南之墓」（東京都）等も参考に付す。

本書はそもそも山本修之助がその父静古編集**『佐渡先哲碑文集』**（上下二巻）を増補し発刊したものである。萩野由之の序文と広田耕南による「山本静古先生伝」を収録する。一四二頁。

『越佐先賢墳墓誌　外篇』（一九三六大橋永三郎編著・養徳文庫刊・洋装一冊）　市島春城題簽・菅原曇華・権田雷斧題。大橋氏は加茂の私立図書館・養徳文庫主事で、墳墓の新潟県内にあるもの「内篇」発行も企及されたが生前叶わず（昭和十三年没）、孫の栄雄氏によって遺稿二六四編の手書原稿をそのまま印刷する方法によって「内篇」としまとめられた。先の「外篇」一〇七篇と併せ一九九五年考古堂制作により刊行（一九九五洋装一冊・五五六頁）。

本書の特色は墳墓に重点をおいた人物伝であるということで、また県内・外に分け一々現地に出掛けて文字の書写、墓石の撮影を行っている点もまさに労作である。例として長野県之部に「長井雲坪墓」があり、略伝は、『雲坪遺墨集』『画人雲坪』を参考文献として挙げ一文を付す。

『秋艸道人會津八一の歌碑（増訂版）』（一九八一早稲田大学文学碑と拓本の会編・洋装一冊）　全国に建つ八一書碑十九基（当時）の紹介。奈良に十一、新潟に六、東京に一、長野一のうち分け。八

一生前の建立は六基。碑文と大きさ・建立年・建碑者・刻者・石質・石匠・写真・拓影および建碑の背景をまとめてある。「歌碑と會津先生」（加藤諄記）の一文を収める。八七頁。

『秋岬道人會津八一碑拓本目録』（一九八一新潟拓本研究会・洋装一冊）　S56・10・23～25日に新潟市内で開かれた拓本展に際し作成されたもの。二九基の拓影と原石写真を収める。三五頁。

『良寛碑をたずねて』（一九七二吉田行雄編著・萬松堂刊・洋装一冊）　全国にある良寛詩歌書碑および関係碑文を紹介するもの。良寛の生涯が浮きぼりにされるよう年代を追って碑を並べている。所在地・交通便・大きさ・石質・筆者・建立者・建碑年・碑文および読み下し文・拓影・原石や背景の写真・筆者による註釈文を載せる。他巻末には略年譜・良寛親交者一覧・参考文献総覧を付載し研究の便を計っている。

『良寛碑拓本展　併催魚心子戯墨展』（一九七六新潟拓本研究会・洋装一冊）S51・10・29～11・4長岡にて開催された企画展の出品目録。六四基の拓影を収める。魚心子ハガキ出品作を付載する。

『いしぶみ良寛』（一九七二渡辺秀英編・考古堂発行・洋装一冊）　良寛碑および関係碑五七基の所在地・筆者・建碑年・建碑者・大きさ・碑文・概要・拓影・石碑写真を紹介。北越書道会『蘭亭』誌に連載した文を中心にまとめたもの。二三七頁。

『いしぶみ良寛・続』（一九九七渡辺秀英編・考古堂発行・洋装一冊）　前掲書と重複しない八三基を収録。一基二頁で紹介し、小林智明氏と江川安治氏の採拓を掲載。一七三頁。

『いしぶみ越佐の先賢』（下越編・一九九九年石川新一郎編著　新津市生涯学習課）

まとめ

今まで列記したものを整理し、重要度の高い書物を使用目的によって改めて区分したい。まず詩書画作家の作品を鑑賞するには、

『越佐の書』（一九七四新潟日報事業社刊）

『越佐の墨芳』（一九七九新潟日報事業社刊）

『越佐の画人』（一九八七新潟日報事業社出版部）

が全県を網羅したもので、かつ図版が大きくてよい。次いで、

『越佐書画名鑑』（一九九三荒木常能編）

『収蔵書跡解読集』（一九九七新潟市教育委員会）

も検索に便利な書物で、代表作家を収録する。

地域に限ったものでは、

『佐渡先哲遺墨』（一九二二萩野由之編）

『佐渡の書』（一九九五新潟日報事業社出版部）

『定本・佐渡の美術』（一九九七郷土出版社刊）

があり、後者は、佐渡生の文士と同じ量の来島作家も含まれ、往来の有様が看取出来る。

続いて人名辞書としては、

『新潟県人名辞書』（一九三九村島靖雄編）

『越佐人物誌』（一九七二～七四野島出版刊・全三巻補遺編一）

に文士略歴を多く掲載し、他、地区毎には

『佐渡人物志』（一九二七　萩野由之編）

『西蒲原郡志補追人物篇』（一九八一市川吉郎刊・栗原九十九編）

が特色ある記述を有し、また編著者の労苦が伝わってくる内容で尊い。

『増訂改訂版東蒲原郡人物志』（一九八〇神田行雄編著）

『県央の人物』（一九八九西方藤七・野島出版刊）

の後者は三条を中心として。柏崎地区も特筆すべき人物を多く輩出した土地柄らしく、人名辞書の刊行がさかんである。書画芸能から離れ、政財界著名人を多く収録したものでは、

『新潟県人物誌』（一九一八　三神正僚編・越後会刊）

を、類書がたくさんある中であげておく。大正七年刊行時、生存者

に関する記述が殆どである。

人名辞書というより書画文人の作風や評価にまで及ぶ記載としては、

『北越詩話』（一九一八坂口五峰編著・目黒書店刊）

『北越名流遺芳』（一九一八今泉鐸次郎編著・巣枝堂目黒書店刊）

が双璧で、二書ともに復刻本がある。これに加え古典的叙述として

『舟江遺芳録』（一九一四風間正太郎著）

『近世越佐人物伝』（一八九八藤山鋹太郎編）が当時古老の言をよく含んでいる。「舟江」とは新潟市の旧称。

私見を述べれば、上記は各々記述に実地調査を含んだり出典に独自性がみられるもの。以下記す分は比べると、先行文献を後人が改めて総合的にまとめ直した性格が強い。使用頻度の高いものを挙げる。

『新潟県史・別編三　人物編』（一九八七新潟県）

『新潟市史　下巻第三章〈人物〉』（一九三四新潟市役所刊・一九八八国書刊行会復刻）

『新潟県人物群像』（一九八九新潟日報事業社・洋装全五巻）

「武」（戦いに生きる）「文」（筆に生きる）「駆」（志に生きる）「興」（産に生きる）「信」（人に生きる）の全六冊。一巻に十人程を収録、各人三・四十頁の記述で人物史を物語風にそして判り易く地元の研究者がまとめた例は『越佐の生んだ日本的人物』等多くがあるが、これらの代表例として挙げる。

石碑・いしぶみもまた人物を調査する際の手がかりとなるが、

『越佐のいしぶみ』（一九七九新潟拓本研究会編）

『越佐先賢墳墓誌』（外篇一九三六大橋永三郎編著・内外篇合本復刻一九九五考古堂刊）

がよい。前書は全県の文学・紀行文・人物誌的な内容の代表例を取り上げ、後者は著名人の墓碑・墓誌の内容を全文収載する。

もちろん関連資料はこれに限らない。掲げたのは、その中から、余りに稀覯本で取り扱いの難しいものや入手不可能なもの、類する内容の多いものをはずした分である。日頃、自分が仕事を進める過程で机上で愛用し、書架に蔵し活用するもの、図書館でお世話になる頻度の高い分を、改めて現物を手に取り確認しながら、本稿の執筆に当たった。

それにしても明治人は、自己の生きた時代を印刷出版技術の黎明期に、よく伝えようと努力した様子が書物ににじみ出ている。先人の伝記をまとめることは、このようにかなり早い頃から行われている。西洋文化や行政機関が天地をひっくり返したように変貌する中で、変わらない気骨ある精神文化を残そうとした人々の結晶が、往時の出版物に看得される。大正期に入ると政財界・実業人を登載した名鑑が作成されるようになる。名誉心をくすぐるような編集がみられるが、このやり方は平成の今なお出版流行りである。

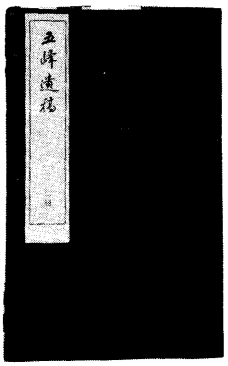
その頃の政治家や企業者は他者と親睦を深める中で、漢詩や和歌・俳句をたしなみ、毛筆文化を多用している。したがって遺墨はあるものの、誰が書いたものか現在判明しない作の中には、案外専門書画家に混じり旦那様・地主・商家・事業者の作がみられる。そのような作を調べる手がかりとしては、名鑑がしばしば威力を発揮するわけである。

残るものとしては、個人の刊行した書画作品集や詩歌集である。生前古稀や喜寿を祝しての刊行や、没後遺徳を偲ぶために門下・親戚が編集したもので、明治から戦前にかけて良質のものが新潟では刊行されている。かつて「まんじゅう本」などと称されたこの種の冊子は、今となっては地域限定刊行であったために入手が困難になっている。見るべき代表的なものを他稿で掲出したい。

『北越名流遺芳』

『北越詩話』

越佐にゆかりの幕末明治名筆展・
会場風景（於新潟県民会館三階）



『五峰遺稿』